Oct. 1894
no. 401

明治十八年初刊

# 女學雜誌

毎週土曜日發兌

第四百一號

社説

要目

熊澤蕃山　長文完結

生死の公案

夕ぐれの秋のおもひ

外國宣教師論（再）

戰死者の遺族の慰さめ

教會堂の利用

北村透谷　明石居士

明治二十七年十月十三日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)


## 第四百一號目録


**社説**

戰死者遺族のなぐさめ
教會堂の利用
生死の公案
外國宣教師論(再)
夕ぐれの秋の思ひ

**雜録**

朝鮮に對する西洋人の觀察
少年のいのち

**徒然草**

樹だま集(泡鳴子)
朝顔◎みこゝろとほる君なれば◎松島
月下戀を讀みて(明石居士)
月下戀(空花生)

**史傳**

熊澤蕃山(完)橋本又作
其學識
諸家の評言

**時報**

女子高等師範學校規程○學生の氣風◎大勝利の粥○金鵄勳章令○北海道移住者○平壤役の死傷數

悲劇 **魂迷、月中刄** (阿波寺鳴門左衛門)
一名、桂吾良。


## 女學雜誌改定の事

◎女學雜誌の編者は、思ひ立つ事ありて、大ひに餘暇を要めんと欲し、則はち、評論を女學雜誌に合併し、女學雜誌を毎月たゞ一回の發行に改ためたり。

◎毎月一回の女學雜誌は、月末に發行し、定價を十錢とし、一年分前金を一圓とすべし。

◎右改定の事は、來る二十七日に出版する第四百三號より實施すべし。編輯の趣き一生面を開かんと欲す。

◎女學雜誌の編者は、今后日本海外傳道會の爲めに盡力し、其の事業の端緒を啓くに勉强せんとす。故に女學雜誌は、從來多年の事業の外に、新たに此事業に同情を寄せ、傳道會の爲めに盡力するを期すべし。

◎海外傳道會の事たる、隆んに本誌上の知己に贊同を請はんと欲する所ろ也。たゞ叙むろに其景況を報告せんことを望むが故に、今ま特更に揚言せず。玆に只だ一事を告ぐ。此會、去七月七日に發起し、某々等五名を以て成立したるを。

◎玆に特に「評論」の爲めに告ぐ。評論は、其第二十九號去る五日の發兌を以て休刊せり。最終の此號、千島シヤシコタンに義死せる高橋傳五郎の日記文(渡島以來慘死の前日に至る迄)二十頁を全載し、些さか以て休刊の精神を壯んにす。知己希はくは一讀せよ。

### ●陳言一則

本號及び次號に於て續出中の長文章を完結せんとし、本號編輯の體裁少しく奇異なることを謝す悲劇桂吾良は次號に於て完結すべし。


Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年十月十三日發兌

第四百一號

社説

# 戰死者遺族のなぐさめ

從軍者の家族を扶助することは素より緊要なり、世人既に之に着手したるを感謝す。戰死したる勇士の遺族を慰藉することは極めて殊勝なり、而して世人亦た之をしも遺すことなし。ひとり彼等の缺乏に扶助し、彼等の悲哀に慰藉するのみならず、之に永遠の生命を得せしめ、究乏流轉の外に變わりなき平安を受けしむることに至つては、宗教の人にあらずんば能はず。惟ふに、今や基督教徒まことに其職を盡すべきの時節、傳道の好機會到る處ろ、切りに彼等を待つにあらずや。

新聞紙屡ば戰死者が遺族の消息を掲ぐ。其報を讀むに、老母、寡婦、すべて是れ女丈夫なり。蓋し君國の大事にあたりて、名譽の戰死を遂げたるは、一家の光榮とす。其母たり其妻たるものにして之を悦こばざることあらんや。左れど、之を悦こぶの厚きによりて、之が悲しみの薄からんことを想ふは、人情を知らざるもの也。祝するの苦しきは弔するの苦しきよりも苦し。笑ふことの悲しきは、悲しむことの悲しきよりも悲し。人情の極痛は、所謂る泣笑ひにあり。

花一片の落るにすら、春光の暗きを覺え、樹梢の木の葉をもがるゝすら、秋のさびしさに堪へぬものを、老ひて子を先だて、百年の友を一朝に失なはんことの如何に心苦しきや。世間の無常これより太甚しきものはある可らず。當にこれ、靈界を思ふて、形骸の外に安慰を求めざるを得ざるの時なり。

宗教者の説教を渇望すること如此く切なるはあらじ。更に惟ふに、此邊の説教は、特り專門傳道者をのみ待つべきにあらず。正に是れ基督教界婦人の大ひに力を盡すべき所ろにあらずや。其の靜和にして穩健なる慰さめと、其の濃厚にして至誠なる信仰とにより、靜かに遺族の家人を訪問して、叙々福音を傳ふることあらんには、基督教徒たる日本國民とし



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、吾國に盡す眞實の高義は、貧にして乏しき彼等が區々たる義捐金に優ること萬々ならんとす。

## 教會堂の利用

教會の婦人會發起して、從軍者の家族及び戰死者の遺族を招待し、世人をして感歎措く能はざらしむる、彼の優美なる讃美歌、女學校生徒の獨吟奏樂、可愛らしき安息日學校小兒の暗誦などを利用し、彼等を奬勵し、彼等を慰藉するも亦た佳ならずや。

此際、成るべく教會堂を利用し、不都合なき限り、戰爭に關する世人の集會所に充て、或ひは各信徒が購讀する各種の新聞紙を列張して公覽に供するの類、亦た好からずや。殊に教會堂は、召集令を掲張するべき場所に組入られんことを屆出づるも亦た佳ならずや。(今の教會堂は寧ろ講義所なり、故に殊更らに然か言ふ)。

此類の處置は、啻に其事の慈善なるのみならず、世人を教會堂に接近せしめ、之に對する僻見を破解せしむるの途、即はち天堂に入らしむるの門なり。



## 生死の公案

人間の大問題、生死の問題より大なるものなし。生死の問題を熱想する、眞とに戰時より良きはなし。請ふ讀者と同もに試ろみに沈瞑して、暫らく此の好題目を念わん。

昔し、妙旨、終に臨みて端坐瞑目するに、一僧、側に在りて曰く、子、辭世の句なき乎と。妙旨、大開眼、叱して曰く、此の一大事の時をと。遂に閉目せり。

豪笑大罵して苦惱を沒くすものあり、冷眼放適して死生を忘るゝものあり、皆な僞なり。慟哭痛泣して戀々止まざるもの、恐怖閉息して縷々糸の如きもの、皆な怯なり。眞とに是れ一大事の時、當に靈眼を開き、全心を傾むけ、滿能の力を盡して、眞實に發明すべし。即はち是れ人間最大智識を獲得するの靈機にあらずや。

ビショップ、バットラー類推論を著わして、推考幽旨に徹す。仲保救主の贖罪を論ずると遺憾なしと云ふべし。而も、其の末期に臨むや戰々として安んぜず、初めて聖經の一句に眞義を悟覺して枕頭僅かに平安を得たり。夫れ、死の床は、ラボラ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

トリーと異なる。必竟空文字、何の益あらんや。
正に今ま一念を沈めて、平壌牡丹臺の下に接し、もしくは黄海西京丸の艦橋に立てよ。巨丸、雨の如く、倒人、亂の如き時、吾が腔子裏の大安心は何如に。

# 外國宣教師論（再）

追々、世間の論題となれり。別段の新意見も聞かざれど、斯く明白に討論せらるゝは慶すべき事とす。不平の勃々たる者は、漏すを可とす。漏さざれば、其の質の純なるや否やを鑑識すると難ければ也。

當に覺悟すべきは、不平を漏すの順序これ也。現に外國宣教師と事を共にし其助力を受けつゝあるものは、須からく先づ其の共同の事業に於て熱苦すべし。未だ初めより公けに他に向つて不平を放つ可らざる也。

もし共同合力すると能はずと覺らば、斷然、手を分つて別々に勉強すべし。此時に至るも尚ほ前日の同人を非毀するは不可なり。君子は交はり相ひ絶つも其の短を鳴らさざるを德とす。傳道者たるもの、無論、此の謹愼あらん也。

既に共同合力の不可なるとを覺り、相別れて箇々の勉强を爲すに至らば、當に先づ分離獨立后の事業を實効に顯昭すべし。これ當日の共同者をして大ひに反省悟徹せしむるの道とす。未だ此の實行あらずして急かに他を非難し、暗に、從來合同の事業の振はざりし責を自己以外に歸せんとするは、高雅の量にあらず。

吾黨の平ならざるものは、今の外國宣教師論が、其の適當せる時所位に立たざるの一事にあり。夫れ今の時は、之を慨論して切りに之を責むべきの時乎。はた、之を論ずる所ろの人其人は、公然之を責むるの權理ある地位に立てりや。更に又、其人にして其論ありとすべきも、乃はち正さに其論を發表すべき恰好の塲所に於てすと云ふとを得べき乎。吾黨、玆に思惟し來れば、自づから不平なき能はず。

世上近來連りに獨立論を聞く。然れども、獨立は、外國宣教師あるによりて毫も妨たげあるとなし。もし眞乎に獨立に熱執せば、即日當下、直ちに起つて奮發するとあらんに、世間何ものあつてか、敢て能く之を妨たぐるとをせんや。然るに



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其口容易すく動きて、其腰容易に起たず、則はち慷慨絶叫して獨立の福音を宣傳すとも何の効あらんや。効の有無は暫らく言ふヿ勿れ。自己未だ嘗て獨立の地歩に立たず、現に外國宣教師の助力を受け、之と合同して聖善の事業に從事しつゝ、而も鷹揚として多年の知人、多年の恩者を非難せんとするは、抑そも任俠勇義の士の肯て爲すべき所ろならんや。

凡そ獨立は何事にも善良なり。內國の宗敎事業にして獨立の段階に達せりとせば、之れ著じるしき進歩なり、誠眞の悅こび也。內外の人ともに祝せざらんや。左れば、吾同胞は、感謝して外來多年の恩人に告別し、從前莫大の助力を眞實に紀念して、而して后ち之より獨立獨勞し、一に以て彼等從來の盡力に榮えあらしむべし。故に、吾同胞の獨立は、好意を以て遂行せらるべし、惡感情を以て斷行せらる可らず。獨立の機や、眞とに一大時節たり。此際實に大義名分の道に誤まるヿある可らざる也。

吾黨の前論を以て、單に宣敎師を辨護すとし、もしくは經濟上の利益を旨とすと言ふものあらば、復た論ずるの元氣なし。文筆たとひ意の如くならずとするも、豈に一片の眞衷其の下に鬱迸するを看取すべからずとせんや。文字、必竟、知己の洞察を待つのみ。

蓋し改革の事たる、正理の顯昭なり。もし大義名分を誤まり、非禮非俠の醜に陷るヿあらば、義人は反つて舊制に賛同し、暫らく假りに一時の同情を寄せんとす。則はち是れ改革の爲めに最大妨害にして、之を除去するヿ太はだ容易すからず。古來改革の事事、大率ね之を以て中止するヿある也。世人稍もすれば陳勝呉廣と言ふ、然れども陳勝呉廣は、果して漢高を起すの誘因となりしか將た妨害となりしか、未だ容易すく知る可らず。輕淺浮薄の改革論は、寧ろ反つて大改革を妨害するヿ屢ば之れ有りと知らずや。

嗚呼、大西鄕の公明正大を以てするも、尙ほ雲井龍雄なきヿ能はず。吾黨が眞とに悶思して措かざる所ろのものは、彼の多血濃厚の俠士これ也。改革の激運、反つて此等の俠士をして反動せしめ、故さらに舊弊に固着して敢て新趨勢に逆らはしむるものは、豈に改革を主唱する率先者の過失にあらずや。見よ、所謂る國粹保存家中の傑士をして、文明に反對せし



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

め、更に基督教に反對せしめたるものは、抑そも何ものぞ。豈に過激法外なる宣言者の罪にあらずや。策士、屢ば激調を以て輿論を動かし、輿論の反つて反動するを知らず。之れ豈に主唱者の道ならんや。吾黨、切りに思ふ、將來、外國ミションの爲めの俠骨雲井龍雄あらざるなき乎と。此の好漢をして空しく徒死せしむるに至るものは、必竟、輕淺浮薄の雷動者先づ囂々たるに由る耳。

## 夕ぐれの秋のおもひ

大言壯語の口をつぐみ、世間に慣ふる慷慨をやめ、日常當世の變化を忘れて、暫ばし寂然として坐し、夕ぐれの景色、次第にくろみて、野面の稲穂こがねの姿をかくし、風のこゝち漸やく寒むく、虫の音おひ／＼高き秋のものおもひこそ、さびしけれ。獨り、天地に對して本の我を顧りみ、つく／＼と思ひめぐらして、古しへの救主が御なやけを考ふれば、袖に涙して身のふるふことのみぞ多かりける。嗚呼、人間、何んぞ相ひ和らぐことの斯く乏しきぞや。



## 雑録

## 朝鮮に對する西洋人の觀察

次郎

◎西洋人が東洋に於ける觀察は、法外に誤まりたるものあり。左れど格外に穿つとも亦たあり。必竟緣故うすき人の批評として、間ま奇警なるものある也。此評を讀むもの、須からく先づ此の覺悟あるべし。

◎サベーヂ、ランダー君、朝鮮紀行に曰く、朝鮮の旅行は一向に面白くなし、景色に壯大のものなく（內地遠隔の地には兎に角）。人民も亦た日本人の如き愛嬌なく美術上の技倆もなし。實にや朝鮮人中には、美術もなし工藝もなしと云ふべし。

◎先づ朝鮮に上りて第一に痛ましきは、人々の相貌、悲哀にして掛念に沈みたらんが如き狀の見ゆることなり。彼等は、懶慢として重々しげに横臥し、明日にも如何なることの起らんかと疑懼するものゝ如し。彼等は、數世紀間絶えず斯ることを掛

念して、而して數世紀間其現狀を改良するとに盡力するともなき也。

◎彼等が會話の題目は、大抵、錢なり。もし錢の事ならずば、食物の事なり。もし其間に爭ひあらば、其元因は金錢上の事なり。路上死を決して鬪かふものあらば、其起りは錢厘の爭そひより來るなり。

◎唯一つの大道は、京城に於ける宮門に達するの道なり。左れど、餘りに大道なるを以て、平生は、草ぶきの屋、其眞中に相列らんで建らる。こゝを以て、一道は併行したる三の街道とはなる也。然るに慣れむべし、此等の草屋は、國王が、鹵簿を調へて國祭の日に行幸せらるる時、もしくは、支那の使を迎恩門に迎へらるゝ時になて、一夜にして取拂はるゝなり。

◎朝鮮の各都城には、大抵、四方に長壁あり、所々に大なる門ありて、此門は、朝夕に開閉す。日沒する比ろ、京城門外に到れば、數百の人、〆出されまじとて群がり來るなり。男、女、子供。歩めるあり、小馬に乘りたるあり、荷を負へる牛を牽くものあり。城内にかなしき音して夕ぐれを告ぐる鐘のひゞきにつれ、彼等は速やかに家路に歸らんと急ぐなり。門番は、心切の心にや、今まさに閉ざさんとする由を、枯れたる大聲にて召立て、後れ馳せの旅人に注意するなり。斯てのち、大なる鐵門固く鎖され、門番は、其傍らなる小さき家に入れば、晝間絶へず勝負をきそひし遊び事に再たび餘念なし。さびたる古き鎗二三本、門外に列べ、城内百万の人の安全を保護するの體裁なり。

◎仁川は、朝鮮の港とは言へど、其實、日本人支那人の開港の如し。朝鮮人の住居するものは、極少數なり。貿易は、多くは穀類の輸出なり。米人、獨逸人等は、綿などを輸入す。郵便局は、日本人の手にあり。電信局は、支那人の手にあり。稅關も亦た支那人の管轄なり。仁川は、眞に畫ける如き港ながら、水淺くして大船入りがたし。

◎朝鮮の家皆な小さし。尤とも奇なるは、床を石にて敷き、之を油紙にて覆ひたるとなり。此の石の床の下には、大なる鍋ありて、之に晝夜火を入る。されば、夜着なくして、直ちに此の床の上に眠るも、甚はだ熱し。朝鮮人は、此のロースト風を好むか。半身、餘り熱すれば、轉じて他の半身を炙るな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り。

◎朝鮮人は懶惰にして且つ沈爽すれども、決して遅鈍なるにあらず。文明國中の英才と思はるゝ如きものも多くあり。彼等が志を起して學ばんとするや、其學ぶこと極めて英敏なり。始めて聞くことに對しても、驚ろく可く諒解早し。其の外國語に慣るゝこと容易すげにて、發音の正しきこと、支那人、日本人にも優る也。

## 少年のいのち

ヂスラエリがコニングスビーに曰く、青年は失策、壯年は苦闘、老年は痛悔か。何んぞ必らずしも然らん。余は一青年の天才をのみ賞せず、其天才の眞に神聖なるを歎ず。見よ、古今最大の二個の艦將が伊太利に打勝ちたるは、其二十五歳の日にあらずや。極少の少年にして、ペルシア大帝國を覆がへせる者あり。アウストリアのドン、ジヨンは亦二十五歳にして近世最大の戰に勝てり、もしヒリツプの猜忌なかつせば、翌る年はモウリタニアの皇帝となりつらん。ガストン、ヂウ、フォーがラベンナの戰に大勝利を得たるとき、正さに二十二歳。彼のコンヅ、レクロイが稀世の功勳と亦た同年齢に於てせり。彼の偉功赫々たりしガスタバス、アドルフハスが死せし時は、三十八歳なりき。其の名高き多くの少かき裨將を見よ、特に驚歎すべきワイマル侯の如きは、死せしとき僅かに三十六歳にあらずや。パニールは巨多の奇跡を爲せしのち、死せしとき尚ほ四十五歳なりき。コルテズがメキシコの金鑛に着目せしときは三十歳を過る數ケ月なりき。其死せしときや、當世最大の將軍、最深の政治家を失ないしと全世界に痛惜せられたるサキソニーのモウリスが死せしときは僅かに三十二歳なりき。子ルソンを見よ。クライブを見よ。法王中の最大なるインノセント第三世は三十七歳にして基督教諸教國の王の王となりぬ。ジヨン、ヂ、メヂシがカーヂナルとなるや十五歳、レヲ十世として法王の聖座に就るとき三十七歳。然るにルーテルが彼より最とも富める領地を奪ひしときは三十五歳なりき。イグナシアス、ロヨラも、ジヨン、エスレーも、青年の時、大事業を成しぬ。パスカルが其大著作を爲せしとき十六歳なりし、佛蘭西の巨人として死せしとき僅かに



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三十七歳なりき。吁、この三十七と云へる齢や、詩人たるよりも更に大なるバイロン、畫人たるよりも更に大なるラフアエルは皆な此三十七歳にして死せり。リシウウが内務大臣となりたる時は、三十一歳なり。ボーリングブローク、及び、ピットが大臣となりたるは、更に早し。

青年の功業、斯の如し。功業豈に多くの年月を要せんや。人生豈に多くの年月を要せんや。然りと雖ども、如此きは、皆な有名の大功業なり、無名の大功業また甚だ多からんとす。見よ、無名の大功業は、有名の大功業よりも更に神聖にあらずや。而して、無名の大功業は、赤誠と至眞とによりて成立することを知らば、青年何人か最大功業を立ると能はざらん。最大功業を立るに、何人の人生か其短かきことを憾まん。

〰〰〰〰〰〰〰〰

樂是心之本躰、雖レ不レ同ニ於七情之樂一而亦不レ外ニ於七情之樂一、雖ニ則聖賢別有一眞樂一而亦常人之所ニ同有一、但常人有レ之而不ニ自知一、反自求ニ許多憂苦一、自加ニ迷棄一、雖レ在ニ憂苦迷棄之中一而此樂又未ニ嘗不一レ存、但一念開明反レ身而誠則即レ此而在矣。

王陽明

## つれぐ草

## 樹だま集

泡鳴子。

### 朝顔。

朝がほや　まみづ　に　うつる　うす化粧。

---

みこゝろ　とほる　君なれば

みこゝろ　とほる　君　なれば、
山　も　野はら　も　へだてなく、
遠き　も　近く　われは　おもふ。
あまつみつゆ　の　深ければ、
踏み行く　路も　むなしからず。
てん地　は　くづれ　ほろびんも、
絶えぬ　は　人の人　なれば、



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世の よしあし は よしあし と、
ひたに たのまむ とこしへ を。
ひたに たのまむ とこしへ を。

## 松島。

八百よろづ かぞへつくせぬ 松島を、
いかなる 神が うませけむ。
霞の ころも、みどりの 冠、岩もすそ！
しづく すがたの おもて には、
秋の夜の 月の ひかりや 照りまさむ、
水 たゞはしき ながめ かな。
端 せまる、富山寺の かねの ねの
消えゆく われ は、その われ は、
行く水の 絶えず ありてふ みわざ こそ、
とこしへ までの 詩の 世界。
目の うち に、生きて うごかむ 氣の すゑは。
生きて うごかむ 氣の すゑ は。



# 月下戀を讀みて

明石居士

空花生は我關西學院の少年詩人なり、課餘呫嗶を事とし、其作る所命意清新にして、辭致頗る工なり。ことし夏暇獨り留りて院に在り、或は麻耶の幽谿に入りて靜に詩想を養ひ、或は茅渟の浦曲に出でゝ優に吟情を壯にす。而して興到り意會すれば則ち口に咏じ紙に寫す、六旬の間作るところ十數篇みな長篇大作なり。

中に一篇「月下戀」と題するものあり、これ予が亡友北村透谷を懷ふて咏ぜるものなり。生もと透谷を識らず、嘗て其作る所の詩文を讀み、又予に就きて其人と爲りを聞き、心竊に慕ふ所ありき。會ま透谷逝く、生悵然として生前に未だ嘗て一たびも面晤する機なかりしを憾み、また其非命を悲み、慨然として此篇を作る。一篇十一章氣格高超にして風骨瀟遠、われ之を讀んで悽惻の情に堪へず。

透谷の逝くや、東都の新聞雜誌擧げて皆天才の早凋を悼み、挽歌弔詞の陸續として其紙上にあらはれしもの實に數十篇の多きに及べり、名匠大家の死と雖も此の如く惜み悼まれしとの般なりしは予の未だ嘗て聞かざる所なり。今又空花生其未見の友を感懷推挽して、情緒の濃なる一に此に至る、透谷以て瞑するに足れり。

世の透谷を謂ふもの一人として其淸逸を稱せざるは無し、空花生亦月に比して其淸德を歎ふ。透谷は實に冲澹淸雅、纖塵些の塵芥を留めず、而して曠達不羈ほとんど常規を以て律すべからざるものありき。其早稲田の專門學校に在りしや二年の間嘗て一回だに試に應ぜず、心靜なる時は則ち出でゝ業を受け、意昂れる時は則ち飄然として去て山川名勝を探り連日還らず、校中仍て「トラベラア」の稱ありしといふ。嘗て商業に志し、校を去て橫濱に往く、橫濱の商人唯利をこれ事とし、奸黠譎詐至らざるなし、透谷旣に之と伍するに任へず、會ま其外輸の貨物市價を失ひ、一敗復た救ふべからざるに至る、透谷即ち牙籌を棄てゝ東京に還る。

透谷早くより速記術に熱す、貴衆兩議院の始めて設けらるゝや、人或は此技を售りて院に出でんとを勸む、然れども透谷もとおのが講學の便の爲めにして之を修めぬ、此傀儡的小技を以て世に立たんは其大に耻とするところ、遂に聽かざりき。

し透谷は抱負頗る大なるものあり、其理想を抱て今日の商業界に入る、其席の暖なるに遑あらざりしは是れ固より其所たり、又苟も利を求めず、若し心に屑しとせざれば寵榮の其前に誘ふありと雖も顧みざるなり。少小より文學を喜ぶ、蹉跎以來私に其天分の在る所を信じ、乃ち文學を以て身を立て家を興さんと欲す、而して其熱意の内に燃えて名を求むるに急なる、靜に其造詣を竢つに堪へず、乃ち「楚囚之詩」を作り、私資を以て之を刊す。世間無名の士を待つに冷なる絶えて之を稱するものなし。透谷爵々として樂まず、是に於て節を折て書を讀み思を鍊り、以て他日の大成を期す、而して予が透谷と相識るに至りしは實に此際に在りき。是の時に當り透谷頗る失意を極め、幽鬱の氣其容色に溢る、而して性もと狷介にして苟も合はず、故に進んで友を求めず、友も亦甚だ親まず、而るに予と一朝相見るや意氣相投合し、傾瀉おの〳〵盡す。既にして「蓬萊曲」出づ、亦售れず、透谷ます〳〵平ならず、常に來りて訴ふ、凡そ此三四年間予は常に透谷の慰藉者たり、又勸勉者たりき。

既にして透谷たま〳〵南石岩本君に識られて女學雜誌社に入るや、文名頓に揚り、交友日に廣く、海內讀書の子弟復た東都に透谷子あるを知らざるものなきに至れり。予一日其肩を叩き「透君復た不平ありや」と問ふ、透谷笑ていはく「稍平なるを得たり、然れども猶未だし」と。嘗て予に言つて曰く「われを開きて稍寛厚なるを得せしめしものは君なり、われを世に薦めて少しく爲す所あらしめしものは南石先生なり」と。然り透谷稍驥足を展べぬ、然れども其本領は未だ嘗て世にあらはれず、其二三年以來女學雜誌文學界其他に出したものは著書の批評小文の述作のみ、而して世間猶珍重推賞して措かず。蓋し透谷戯曲の作に志を專にす、其筐底に藏して猶稿を脫せざるもの、其腹裡に結搆して未だ筆にのぼせざるもの、はた其造詣によりて將來如何の大作を爲すや、此種のもの一旦世に出づるあらばいかに天才の發露して結搆閎致の雄大雅健なる世人の嘆稱は果して如何ならむ、今や此志を抱て召されて白玉樓上に李賀が後を追ふ、亦悲しからずや。



然れども予が透谷の死を悲むは廣く世の爲めに一詩星の其光いまだ鮮灼ならざるに當りて沒せしを悲むよりも、われ自身に眞友を喪へりしを悲むや切なり、これ予と透谷との情誼然らしむる所たり。嚮に透谷の追悼會の催さるゝや、南石君予に電報して追悼の詞章を徵す。予時に徒に講ずるに詩の伐木の章を以てす、

伐木丁々、鳥鳴嚶々、出自幽谷、遷于喬木、
嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、
矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平。

嗚呼それ鳥は特に一物の微のみ、而して猶單棲獨唱に任へずして、敢て高きにのぼり、嚶として鳴き、以て友を喚び、唱和の樂を得んと欲するや此の如し。矧んや伊の人將に德に進み業を修めんとする必ず友生を求め、切々偲々、上天の感孚によりて以て和平の福履を得ざるべけんや。抑も予の透谷に於ける豈に惟文學の友たるのみならんや、相濟ふに道を以てし、相孚するに心を以てし、窮乏には相救ひ、長は推し短は遂て、其堅き金石の如く、其臭ひ蘭の如し。去春予職を失ひ、一貧洗ふが如し、予嘗て之を云々せず、透谷予を過ぎり、嚢を探りて若干金を机上に置きて去りぬ。朋友には相助くるの義あり、故に予敢て之を拜せざりしと雖も當時予が心の感銘それ果して如何なりしぞ。朋友恩を以て相信ずるを任といふ、予と透谷とは實に斯任道を以て交りしに、今やわれ斯人と斯道とを合せて倶に喪へり。われ南石君の報を得、伐木の章を反覆して感愴やむこと能はず、即ち筆を執り、此意を以て文を編んとせしも、わが寓する所の地僻遠にして電報の達する猶二日を要す、されば時迫りて期に逢せざるを慮り、つひにやみぬ。

本月一日午前われ偶まアルビング小品文集を繙き、「郷曲葬儀」を讀む。一路文字閑雅優麗にして、巧に英國郷曲悼亡の温情を描き、末段死者を悼むの悲痛は人の之を忘るゝを欲せざる所、この創傷のみは更に療術を施さゞるを以て吾人の義務と思惟し、身閑に心靜なる時には之を追懷し、之を感愴して、以て此の病害を助け養ふめり、而して生前わが交情の盡さゞる所ありしを憶ひて痛悔やむことなしといふに及びて予は頻年屢ば良友を喪ひしを以て慘惻禁ずる能はず、而して去年の此月此日、しかも此時は予が帝都を辭して任に赴き來るの際國府津の停車場にて透谷夫妻及び其寵娘と三五分の款語を爲し、再會を約して手を握りしの時なれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ば予が心の感懐また一段艸々の情に堪へず。而して其結

"……..but take warning by the bitterness of this thy contrite affliction over the dead, and henceforth be more faithful and affectionate in the discharge of thy duties to the living."

といふに至りては予生者に對する一段の温情油然として沮むること能はず、即ち書を未亡人に裁して以て懇懃の意を致しぬ。

はじめ透谷知友の競ふて其弔悼の辭を諸新聞雜誌に出すや、人或は予が一文隻詞の之に及ぶものなきを異みたりき。われ既に機を失ひ、また悲悼の情に驅られて之を作るに懶し、かつ深交予の如きもの一片の辭を以て多年金蘭の友誼を葬り了すべからずして、予が爲すべき所のものは猶他に存するあるを知ればなり。然るに今空花生の詩を讀みて、端なくも追悼の念今更の如くに湧きて禁ずること能はず、故に略意衷を述ぶ。生の文辭に至りては予透谷追悼の情に制せられて今批するの暇なし、その旨意の瀟遠にして詞致の清順なるは江湖讀者の翫索に任せんのみ。生姓は淺田氏名は彦一君、年いまだ冠に至らず、われ其透谷が後勁として他日優に一幟を東都の詞壇に樹つるを期するものなり。

噫嘻われ透谷を憶ふて此文を作る、意も到らず、筆も亦隨はず、忸怩としてこの「月下戀」を援りて琅誦一番す。時に十六夜の月高く中天に懸り、皎々として寓樓を照し四隣の物象歴々畫の如し。われ蒼蒿悽愴透谷の英靈毅魄髣髴として予が前に現じ來るが如きを覺ゆ。

---

That death seems but a covered way,
　Which opens into light,
Wherein no blinded child can stray,
　Beyond the Father's Sight.

That care and trial seem at last,
　Through memory's sunset air,
Like mountain ranges overpast
　In purple distance fair.

J. G. Whitteer.

# 月下戀

## 月下透谷子を懷ひ出でて。

空花生

うき世のほかに　ゑみたまふ
　君がこゝろの　つれなさよ、
包みたまはぬ　面影は
　眞如のひかりと　かゞやけど、
人と生れし　かなしさは
　空しくちりに　むせぶのみ。

ひかりさてなき　闇のよに
　せめてとばかり　みひかりを
洩したまふは　人の子を
　照らしたまはん　みこゝろか、
はたまた弱き　この身をば
　まよはさんとの　みこゝろか。

松の葉末を　地によませ
　きよき流れに　身を洗ふ、
あなうるはしの　吾きみよ
　しばしの契り　ゆるしてよ、
まごゝろこめし　かひもなく
　たちまち雲に　うせましぬ。

野末の露に　きみはしも
　うつりたまへど、　み園生の
花のうてなに　君はしも
　宿りたまへど、　わが身には
アヽ空蟬の　吾がみには
　思ひのみこそ　まさるなれ。

須磨や明石の　うら磯に、
　石山三笠の　山の端に、
君を慕ひて　旅衣
　いたらぬくまは　なけれども、
空蟬の身の　かなしさは
　姿ばかりに　こがれつゝ。





Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あなうるはしの
　ちりもちらさぬ
その姿
　清けさよ、
ミユスの神は
　など大空に
この君を
　すませけん、
地(つち)になきふす
　あだし思ひに
人の子を
　もやすまで。
うきよの人は
　「月」のきみさぞ
汝(いま)しをば
　よびなせど
汝(な)こそまことの
　神のたまひし
「美」の君よ、
　ものみなに
美(び)ならぬものは
　なれにまされる
あらされど
　ものぞなき。
神はよびさに
　與へたもふさ
ものみなを
　きゝにしを、
この君のみは
　肉をかぶれる
なかく〜に
　人の子に
ゆるしたまはん
　あはれつれなき
色もなし、
　おほみ神。
くちてはつべき
　高きさほさき
この身もて
　美のきみを
戀せしことの
　しかも世人を
をぞましさ、
　友さして
塵にかへらん
　思ひかへせど
それまでさ
　わがこゝろ。
おもひかへせど
　よなく〜君に
吾こゝろ
　てらされつ、
いよゝ思ひの
　肉をはなれて
ますかゞみ
　靈界に
こよさのたもふ
　いかに吾身を
君がこゑ
　もやせしか。
あはや高嶺に
　わが戀人よ
いりたもふ
　いましばし、
靜かにあゆみ
　吾れもろともさ
たまはすや、
　おもひしを、
アゝ吾きみよ！
　アゝ美のきみよ！
美の君よ！
　わが君よ！』

## 史傳

### 熊澤蕃山（完結）

橋本又作

### ○其學識

蕃山は尤も政治經濟に長し、其所說は荻生徂徠、大宰春臺等、暗に之を取れりといふ。時處位の三者を識るを以て、要となせり。其論する所、米穀を貴び、金銀を賤しみ、商賈が貨財の權を操るを防ぎ、兵を農に寓して以て、冗費を省き、以て武力を强うす。國用を軍用と異にして、以て制度を定め奢侈を抑ふ。賦斂の制は、貢法を以てよしとす。學校の制は、文武を合して一とす。又曰く、黃金白銀は天地の至精なり、今妄に之を採り、以て海舶の用に供し、國の膏髓を竭して、無用の玩物に易ふるは、長策にあらずと。又、耶蘇教を論して曰く、我邦幅員甚た廣大ならずして、多く寶貨を產す、これ外國人の貪り取らんとする所以なり。然れとも邦俗武を尙ぶ、故に奪ふ能はず。太平の久しき天下偸安、武備日に弛む、後世必ず北狄の窺ふ所とならんと。其執る所の學は、朱子によらず、陽子に偏せず、實用を旨として、空論を悅ばす。時を救ふを以て、先務としけるなり。集義和書に於て曰く、

愚は朱子にもとらず、陽明にもとらず、たゞ古の聖人に取て用ゐ侍るなり、道統の傳のより來ると朱王共に仝し、其言は時に因て發するなるべし、其眞に於ては符節を合せた

るが如し、又朱王までも各別にあらず、朱子は時の弊をたむべきが爲に理を窮め惑を辨ふるの上に重し、自反愼獨の功なきにあらず、王子も時の弊に因て自反愼獨の功に重し、窮理の學なきにあらず、愚拙自反愼獨の功の内に向て受用をなす事は陽明の良知の發起に取り惑を辨ふるの事は朱子窮理の學により侍り、朱王の世、學者の惑、異なり、地を易へば同しかるべし、窮理とて事々物々の理を空にいひては人の疑あり、たゞ學者の心の惑ある所の事物に因て其理を窮むるなり、されば是は初學の時の事なり、大意、心に知得すればいまだ不辨不知の事、千万の事物、前に來ると雖もまとふべき事なし、異學の一代、心を盡すさとりといふものは聖學においては力をもいれず、心をも勞せずして遊びながら得る事なり。

常に弟子に語て曰く、古へ儒の名なし、始て周官に見ゆ迺ち文學の稱あり。然れども人の道を學ぶ者、豈悉く儒者ならんや。記に曰く、魯の哀公、孔子に問て曰く、夫子の服、それ儒服かと。孔子對て曰く、丘少にして魯に居り、縫掖の服をき、長して宋に居り、章甫の冠を冠す。丘之を聞けり、君子の學や博、其服や鄕と丘、儒服を知らずと云々 此れ信に聖人の語なり。其他儒行を張皇するが如き、皆後人の假托する所のみ。今の儒といふもの、率ね其習ふ所に溺れて、其本を失ふ。後儒賢と雖も、豈悉く弊なからんや。直に堯舜を師とするに若かず、堯舜を師として、過つものは未たあらざるなり。大抵、今人の師とする所、宋の朱子と、明の王子とに過ぎず。夫れ晦菴は大儒なり、經傳を發輝し、後學を嘉惠す。陽明は文武の士なり、良知良能、其放心を求め、學問事業、其途を二にせず。學者苟も之を得ば已む。然れども理學は博に失して、支離の弊あり。心學は約に過ぎて、頓悟の弊あり。その晦菴を宗とするものは、なほ釋徒の日蓮を奉する、或は佛に過ぐるが如し。朱子の語といへば、一意崇信して敢て、其聖經に合ふと、合はざるとを問はざるなり。陽明を宗とするものは、陽儒、陰佛、遂に異端となる。此れ豈二子の本意ならんや。

朱子、王子に對しての見は此の如し、江西學に對してもまた、意見を異にする事ありて、往々此を議せり。されば中江氏の門人、西川季格といふ人、蕃山が己を先にして、師を後にし、陽明、藤樹の學脉に背きしとて、痛く憤懣し、集義和書顯非といふを著して、之を辯難せり。

世の縫掖の徒、高きものは道學を以て己か任とし、耿介絕俗號して儒者となし、士に非ず民に非ず、方外異端の徒と、歸を同しくし、卑しきものは博物多識、以て祿仕を求むるを見て、心竊に之を鄙む。迺ち曰く、學は人倫を明にする所以なり、儒者の私業に非るなり、古の學者、己の爲にす、徒に席上の珍となすに非す、聖賢己を治め、人を治むるの道をして、空言に歸し實用に遠さからしむる、是れ誰の愆ぞや、士君子の學、當に文武兼資、之を事業に施して、以つて天職に供すべし、吾寧ろ一介の武夫となるも、儒家者流たるを願はざるなりと。



Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

儒學に對しての意見は、大畧右の如し。其國體に關しての見は、集義和書に見えたるものなり。曰く、

或人問、他の國にては誰にても天下を取ては主となる事なるに日本にてはかく　天子の御筋一統にして天下を取る人も臣と稱し將軍にして天下を知りたまふはいかなるいはれにておはしますや。

云、中夏は天地の中國にして四海の中にあり、南に六の國あり、西に七の國あり、北に八の國あり、東に九の國あり、是を四海といふ云々四海の中にて九夷すぐれたり、九夷の內にて朝鮮、琉球、日本を、すぐれたりとす、三國の內にては又日本をすぐれたりとす、されば中夏の外、四海の內には日本に及ぶべき國なし、是天照皇、神武帝の御德によれり、大荒の時、日本の地生の人は禽獸に近し、然る所天照皇の神聖の德を以て此國の人の靈質によりて敎をなし給ひてより初て人道明かなり天照皇は地生におはしまさず、神武帝其御子孫にして天統をつぎたまへり、氏系圖をいふ事も王孫のたゞ人と成て國土の姓に異なるが故なり、然れども一度たゞ人となりぬれば天統をつがず、地生に均しき故に天下を取りても帝王の號を得る事、叶はず、三種の神器を身にそへ奉りて天津ひつぎをふまんとは天照皇の恐れ多く且天威の許さぬ所あり、日本のあらん限りはかくの如くなるべし、

他の國にはなき例なれども日本にては必然の理なり。

皇統一系の由來を說て明かなり、國史に通ぜるものにあらざれば、此見をたつると能はず。當時、國學未た盛ならず、然るに儒者にして、此見ありしは高しといふべし。

彼はもとより、文筆の人にあらざるか故に、文章は其所長にあらず、然れども博學の致す所、模範として取るべき所少からず。此人、國學をもなせるとは、先に述べたり。今其著源氏外傳卷首にのせたる、源氏物語に付ての見解を見ば、蕃山か如何に此書をよめるかを知るべし。

前畧

源氏物語はおもてには好色の事をかけども實は好色の事にあらず、此故に源氏ものがたりを好み見る人にも正しきに過きたる人あり此物がたりを、かきたる意趣は万の事、世の末になり行かば上代の美風衰へて俗に流れん事をなげき思ふさいふさもあらはに正しき書は人忌みて近けず、見る人少ければ世にあまねからず、敎をたてる事は多けれさも嗣すくみて人いさふ、心あれば其書久しからず、又有ても見る人なければなきに均しければ書きても其詮なきこさを思ひはかりて、しひて敎がましき筆法をあらはさずたゞ好色のたはふれとさなして其中に往しへの上臈の美風、心用ゐをくはしく記しのこせるものなり、それをもこさのこゝろなく一向の作りものがたりさして、よくいへりよくかけるなどいひてよの常の口にまかせてかきたるこさ物語のやうに思へるは淺見の人の和漢の書にくわしからざる故なり、尤も莊周の寓言に類して彼を是さ非し昔の人の上を今の人のこさのやうにいひ、もろこしこさをやまさのこさゝなして書きたるこさはあれども其實は皆證跡あるこさどもなり、故に古人も實なるこさは司馬遷が史記の筆法なりさいへり、近代の人のこさをかくさんために源氏さいふ好色人の名をかりに立てゝ作り物がたりさいひなし古今和漢の故事又は其世のこさまでもさりあつめておほせかきたるなるへし、紫式部が父爲時は博學逸才の人にて國史をかきつかんさて、下かきしをけるを式部さりて此物語にかきなしたるさもいへりされば一條院もこの物語を御覽して、日本紀をこそよく讀みたるものなれさ仰せられしさぞ　後略

大に見るべきものなり、全編一字、一句に就て、疑を質せるものなり。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蕃山の著書と稱するものには、僞書多く、生前已に顯はれたりしなり。或人、往々、世に蕃山の著と稱して、實は然らざるものあるよしを以て、蕃山を戒めけるに、蕃山「まことに五倫書などは、まさしく作者ありて我等の生れざる前に出たる書に候、七十餘の人は、五十年前に見たると申者御坐候。しかるに我等の書に極りて、此間批判の書まて出て申候」。其外、名もしらぬ書に、愚作と申すが多きよし承り候。又愚作と申も無餘儀ほと似たるも出て候。我等の書物を朝夕見て取用ゐたるにてあるべく候」云々。蕃山實錄（門人巨勢直幹著）にも、「假先生之名欲逞己說而鏤梓之書多矣勿用」とあり、即ち其眞書と稱する者、

| | | |
|---|---|---|
| 集義和書　十六卷 | 集義外書　十六卷 | 三輪物語　八卷 |
| 神道大義　一卷 | 二十四孝評　一卷 | 大學小解　一卷 |
| 中庸小解　二卷 | 論語小解　八卷 | 孝經外傳或問（一名經濟辨）　十卷 |
| 易繫辭傳小解　三卷 | 易小解　二卷未完 | 大學或問　二卷 |
| 夜會記　四卷 | 女子訓　五卷 | 三神託解　一卷 |
| 源氏外傳 | | |

此外に其著述と稱する者、孟子小解、紫女物語、葬祭辨論、女子訓或問、何物語、宇佐問答、等あり。

和歌は先に屢あげたるが大に巧妙なるものあり。既に擧けたるもの丶外、世に蕃山の作と稱するもの、

うき事のなほ其上につもれかし
　　限りある身のこゝろためさん

何れの時の詠か、難に居て屈せざる氣象、顯然たり。

又、備前にて今樣を作り、童子に敎へ、歌はせしとて、傳はれるあり。即ち、

人はとがむともとがめじ　人はいかるともいからじ
いかりと慾とをすてゝこそ　つねなこゝろは樂しめ

又「露のひぬ間の朝顏を照らす日影のつれなさにあはれ一むらさめのはら／＼とふれかし」といふ、今樣は、蕃山の作にて、朝顏日記は、此歌によりて、構造せしものなりといふ。

又聯歌をよくし、其名家、里村玄祥及び飛鳥井雅章、中院通茂等と交りき。玄祥の家には、蕃山の獨吟二百韻を藏せりとぞ。

## ○諸家の評

以上、大畧彼の性行を擧けたれば、之より諸家の評を揭くべし。

荻生徂徠は、蕃山沒後二十年の人なり。古學を以て其名、一世に重く、先輩を輕視して、推服する所なかりき。然るに其藪震菴に與ふる書に曰く、「問を承く、熊澤集書、不佞未た其書を見ず、曾て聞く、其人甚た聰明、蓋し百年來儒者の巨擘、人才は則ち熊澤、學問は則仁齋、餘子は碌々未だ數ふるに足らず」と。又曰く「仁齋の德、熊澤の才、余の學を合せて一とせば則聖人といふべし」と。

湯淺常山亟々蕃山を稱して曰く、其經濟、老子より出づ、地を鑿て、銅錢を取るを以て、是ならずとなす。蓋し漢の貢禹に基く、大抵熊澤氏の說、迂濶に似たり。然りと雖も、年後驗多きを以て見れば、實に世儒の及ぶ所にあらずと。

服部元喬曰く予、熊澤の經濟說を讀むに、足其地を蹈み、口其

政を論ず、確說、他人の空言に似ずと。
或人、押小路三位公起を見て語次、伯繼に及ぶ。公起曰く、吾子の了介を知る所以のもの、其書を讀て其人を想ふに過ぎず。書、何ぞ人を盡さん。昔は余親炙數年、感服の深き翅に郭奕の阮咸に心酔するのみならずと。
南川維遷曰く、凡そ吾國百五十年來の儒士、皆屠龍の技にて學び得たる所を行はずして、一生を終る。白石と雖も十分か一も施し行ふことを得ず。その餘、儒生の諸侯の國に仕ふるもの、皆閑官散職に投せられて、文字訓詁の顧問に備るのみなり。息遊軒の遇を得たるが如きもの一人もなし。岡山の政治には、今も其流風ありと聞けり。退居の後、著述さま〳〵あり。その學問は象山、陽明の心學より出て、孤峻なる學風なれども、全躰、度量潤大なるを以て心法のみにも繫縛せられず。且、經濟地理に練達せる事、拘々たる儒生の及ぶ所にあらず、集義和書、同外書、葬祭辨論を見て知るべし。予又、大學術義といふ書を見る。此書は大學の中の、治國平天下の別卷にて、國天下の治體のみを說けり。經濟に志あるものは、必ず見るべき書なり。元來、孤單なる心學より出てたる學風故、政事にもけやけき事ありしと見ゆ。一二の非を執して、其餘の功を廢すべからず。徂徠、春臺の經濟にも暗に、息遊軒か意を潤飾せし事まゝ見えたり。予が友の物語に、岡山の寺院を見るに、息遊軒の頃の石塔は、賤しき農工商に至るまで、法名を彫らずして、男子なれば何太郎、何兵衛が墓としるし、婦人なれば於八十、於淸が墓としるせりとぞ。蘐園談餘爲學初問などに、寺社を破壞したるよしを大に誹れり。然れども、それを見て其外の功を廢すべからず。總て人を論ずるには、その人の全躰をよく知て、功罪を辨へずんばあるべからず。徂徠の言にも、學問は仁齋、人才は熊澤、餘子は碌々、取るに足らずといへりと。
萩原善韶曰く、宋大祖、竇嬰に、鏡に乾德の年號ありしを問ひしかば、竇嬰、蜀の年號なりと答ふ。大祖歎して、宰相には、讀書の人を用ゐるべしといへり。林道春、始て神祖に見えし時、神祖、返魂香の事及び劉玄德は中山靖王より幾代目なるかと問はせられしに、道春答て返魂香の事は、長恨歌の註に見ゆ。玄德は中山靖王より十代目なりと。神祖悅ばせたまひ、すぐに道春に祿を賜はりたりと。此事、竇嬰、道春に於ては、榮なるに似て榮にあらざるなり。乾德の年號、返魂香等の事、何の補益かあらんや。知らざるも君子たるに害なく、これを知るも小人たるに損なき事なり。荀子に、君子之所謂、知者非能徧辨人之所辨之謂也云々、言必當理、事必當務是君子之所長也と。二子の言、君子の務むる所にあらざる事、見るべし。先王聖人の道、もしくは國家の典章禮樂文物等の問にて、其事を詳にして對せしなれば、誠の善學者といふべきなり。然るを二子、無益の事にて、稱譽せられしを甘心せしは、其志甚た卑くして、修己治人の業地を掃ひしなり。宋の太祖の、宰相には讀書の人を用ゐるべしとの歎、甚はた學者を輕する言、もとより論するに足らず。神祖の問はせられしは、學者を輕したまふにあらす。道春は唯、博識の人に



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して、眞の儒に非るを以てなり。眞の儒なれば、人も亦眞の儒を以て之を見る。况や明上に於てをや。松平伊豆守信綱は、猷廟の時の執政にて、才能に譽ある人なり。信綱、常に儒者を厭ひ、毎度儒者めは迂濶にて事を害するものなりと言はれし故、林道春などは、自然に人とふものも、寂寥としてをられたりと。老談一言記に見ゆ。然れども信綱、熊澤蕃山を招かれし時は一室に請して上座に延き、臣下を交へず、御夫婦にて盛膳を饗し、尊敬して道を問はれしと。又ある時、信綱蕃山の宅に行かれ、供の人、蕃山が愛する庭の竹に、鄙褻なるものを畫てかへりしかば、蕃山怒て信綱に訴ふ。信綱大に怒り、蕃山先生に對しかゝる失敬あるべからずとて、自身に其畫きしものを斬られたりと。かくの如く蕃山を尊敬せられしは、信綱、蕃山の大儒なるを知られし故なり。然らば儒者を厭ふにはあらず、迂儒を厭ふなり。其他の迂儒なるを知られし故なり。



德業、文學兼備の人にしては、豈何くに往くとして、人に厭はるゝことあらんや。末世浮華の學は、人も亦浮華を以て之を視る。もとより論ずるに足らざるなり。

藤田幽谷曰く、熊澤伯繼抱王佐之才而位不過陪臣雖有經世之畧不能施諸本朝猶以區々之備立政、成敎可傳後世後之學者稱其足酬平生之志其然豈其然乎、屠牛之刀試諸割鷄盛名難處身、以纔廢悲夫、昔賈生不容於孝文時而其治安策終漢之世莫不皆驗伯繼既沒而其言尙立斯亦足以不朽矣。

（完結）



# 時報

## ◎學校

○女子高等師範學校規程　去る十二日文部省令第二十五號を以て發布せられたる規定左の如し。

第一條　女子高等師範學校の學科目は倫理、教育學、國語、漢文、歴史、地理、數學、理科、家事、習字、圖畫、音樂、體操とす
前項學科目の外外國語を隨意科とす

第二條　女子高等師範學校の學科は尋常師範學校女子部の課程に照らし更に一層精深なる程度に於て教授するものとす

第三條　修業年限は四箇年とす

第四條　第四年級生徒は附屬學校及幼稚園に於て實地授業及保育に從事せしむへし

第五條　女子高等師範學校生徒は左の資格を有するものより地方長官之を薦擧し學校長に於て試驗の上選拔するものとす但臨時に缺員を補充するの必要あるときは明治二十六年文部省第十一號に依るへし

一　身體健全品行方正にして教員に適當なりと認むる者

二　尋常師範學校二箇年の課程を終へたる者若くは之と同等の學力を有する者

三　年齡十六年以上二十一年未滿の者

第六條　入學試驗に及第したる者は一定の期間假に入學せしめ其資性品行才能を審察し適當と認むる者に限り本入學を許すべし
假入學の生徒は自費とす但本項は明治二十八年度より施行すべし

第七條　生徒在學中疾病に依るの外自己の便宜に依り退學を願ふものは支給せられたる學資を償還せしむべし
卒業の後正當の事由なくして服務の義務を盡さゝる者亦前項に同じ
文部大臣は其の情狀に依り前項償還すべき學資の全部又は一部を免除することあるべし

第八條　尋常師範學校女子部又は高等女學校教員たるの志望を有する女子にして女子高等師範學校學科中の一科目若くは數科目を撰びて修學せんとする者は撰科生として入學せしむることを得

第九條　明治十九年文部省令第十七號を廢す
文部省令第二十五號參照
明治十九年（十月十四日）文部省令第十七號は高等師範學校の學科及其程度なり

文部省令第十一號（明治二十六年八月五日）

高等師範學校及女子高等師範學校に於て生徒の缺員を臨時補充する必要あるときは文部大臣の許を受け明治十九年文部省令第十八號高等師範學校生徒募集規則第一條乃至第三條の規程に依らず學力年齡當該學級に相當の資格ある者を募集し試驗の上入學せしむることを得

▲因に云ふ　右は前井上文部が未だ其職にありし頃高等師範學校規程制定に意を注ぎ男子部に關する規程は已に其在職中發布したれども女子部規程は未だ其運に至らざりしかば爾後引續き取調の上今回發布せられたる次第にして高等師範學校規程茲に至りて初めて完成を告げたるものなりと云ふ

▲東京府告示第六十八號を以て、當府下に住居するものにして女子高等師範學校に入るもの丶爲め、左の如く達せられたり。

來明治二十八年四月女子高等師範學校へ入學すべき生徒三十二名募集に付ては當府下に居住し年齡凡十七年以上二十一年未滿の未婚者にして尋常師範學校二箇年の課程を終りたるもの若くは之に均しき學力並資格を有し當廳の選擧に應し該校へ入學望の者は來十一月十日限當廳へ申出へし

明治廿七年十月一日　東京府知事　三浦安

○學生の氣風　文學隆盛の氣焔消滅せし以來學生の氣風は法、醫、工等に傾き居りしが近頃に至り又々好んで文學書を讀むの傾向を生じ而して其文學なるものも漢書及び稗史小説類に非ずして重もに和文學を望む由にて上野公園なる圖書館及び大日本教育會なる圖書館に於て讀者尤も多きものは文學書を第一とし其次を法律書とし地理歴史理學生理等之に亞ぐ由にて今之を細別すれば其百分比例の割合は左の如くなりと云ふ

| | |
|---|---|
| 文學書 | 百分の廿六 |
| 法律書 | 百分の廿四 |
| 歴史 | 百分の十二 |
| 地理 | 百分の十 |
| 雜書 | 百分の廿八 |

## ◎片々

○「大勝利」の菊　宮内省にては毎年菊を培養せらるゝ事なるが同省技師福羽逸人氏の監督せる南豐島郡各御料地にて培養する者は最も有名にて其大きさ直徑三寸もある由にて昨今漸く莟を破んとする風情なれば改て「大勝利」と名付け廣島なる大元帥陛下の御許へ献上せらるゝ由なり。

○金鵄勳章令　金鵄勳章年金令は去月二十九日御裁可を經て去る三日公布せられたり其全文左の如し。

▲第一條　金鵄勳章を賜ふ者には功級に應じ終身年金を加賜す

▲第二條　金鵄勳章年金の定額は左の如し

功一級九百圓　功二級六百五十圓　功三級四百圓　功四級二百十圓　功五級百四十圓　功六級九十圓　功七級六十五圓

▲第三條　本令の年金受領者死亡したるときは仍一年間遺族に其の年金を賜ふ

▲第四條　前條の遺族とは寡婦孤兒父母及祖父母にして年金受領者生存中より戸籍簿に登記したる者を云ふ

▲第五條　本令の年金は他の勳等年金又は恩給を受くるに妨けなきものとす

▲第六條　本令施行に關する細則は閣令を以て之を定む

○北海道移住者　北海道廳長官隨行員より「日本」新聞社に報したるものによれば左の如し。

○明治廿七年上半期移住戸口表

| | 戸口 | 人口 |
|---|---|---|
| 札幌區 | 三四九 | 九七四 |
| 函館區 | 一、四一七 | 四、四七九 |
| 札幌郡外九郡 | 二、四八一 | 九、〇六八 |
| 龜田郡外三郡 | 四六〇 | 二、五〇〇 |
| 松前郡 | 二五 | 一九五 |
| 檜山郡外五郡 | 一四八 | 五九七 |
| 壽都郡外三郡 | 一五八 | 七七七 |
| 岩内郡外一郡 | 二三九 | 一、一八九 |
| 小樽郡外六郡 | 六八七 | 二、五九七 |
| 増毛郡外五郡 | 一四四 | 五三〇 |
| 宗谷郡外三郡 | 二八四 | 九七五 |
| 網走郡外三郡 | 一〇五 | 八七一 |
| 室蘭郡外五郡 | 三〇四 | 一、一五四 |
| 浦河郡外六郡 | 一七〇 | 七一二 |
| 釧路郡外十二郡 | 二八四 | 八四三 |
| 根室郡外九郡 | 四四一 | 一、〇四一 |
| 紗那郡外三郡 | 七 | 二七 |
| 計 | 七、七〇三 | 二八、五二九 |

○平壤役の死傷數は左の如しと云ふ

死者｛將校　八名／下士卒　百五十四名｝

負傷｛將校　二十六名／下士卒　三百七十八名／雜卒　三名｝

外に生死未詳下士卒四十人

敵の死傷

死者　二千餘人

傷者少くとも死者の二倍

生擒者

清人　五百十三名　韓人　十四名

内我野戰病院にて現に治療を施しつゝあるもの淸人百二十名韓人二名とす

（「日本」新聞）

民子。　あゝ、どうぞゆるして、ちェえゝ、くださりませいなァ！〔民子父にすがりて泣く。〕

桂。　ほとゝぎす、
　　こゑや　こほり　の
　　　血　一魂！　〔桂入る。〕

瀧子。　民子、あれでは、おまい、見きらねゃならぬ。

民子。　いえ、わたしはどうなッても、見きられませぬ　わいなァ。

定行。　これゃ、馬鹿もの！　何んだといふ？　あんなものを慕たッたとて、いつらちがあくものか、手まへも出て行きたいか？

民子。　はあゝ！

瀧子。　もう、泣いても、仕かたないよ。

民子。　わたしゃ、そんなら、死にたう御坐んす。

定行。　よくいッた、馬鹿ものめが！　――　おのれ死なしてよけれゃァ、こんな苦勞はせないわい。

民子。　えゝ、かたじけなう　〔木の頭〕

民、瀧。　御坐んすわいなァ。
〔見えよろしく、道具まはる。〕

## (二)　おなじく桂勉强室の場。

〔本舞臺森邸内の一室、下手に窓、そとは高き杉の木、桂窓下の机によッて、ハムレットを開らひたまゝ、おも入れ。床の間に一劔。〕

桂。　樹の葉はしづんで、いしが浮く。うき世はげにむなしいゆめに相違あるまい。かくも亂だる娑婆世界、必竟、つくッたぬしあらば、萬物備はッた人間に、なぜまざ〲あらはれん？　人をなやみくるしめ、これをあざけッとるなら、なぜわれをうました？　はじめ無くんば、わが身もまたをはり無かッたのに。思想以ッてうまれ來たり、思想以ッてこのわずらひ。人は限ぎり脫し能はぬか？　智識得れば得るほど、智識のくるしみあり、からだあればある爲め、からだのくるしみあり。絕ちきられぬこの煩惱！　治しがたきこの苦痛！

すくひ給ふ神ありと信じがたきこのからだ、これも一とつのかたき。討つはやすいが、しかし、考がへば考がへるほど、他人も他人でなければ、われまたわれにあらず。懷疑はむねに一ぴきの虫あッて產み出すのか？　めがみ戀ひしたッたのは、このちりの形骸なるか？〔書に目をそゝぐ〕讀んでこゝに至たれば、いつも讀み去りかねる。何にが、かゝる高尙なおそれ、恐怖に堪へて居るだらう？〔これを誦する。〕

「死のか、死のまィか、一思案、
　どち　貴ッとかろ、はげしき
世　の　矢だま　堪へるの　と、
自さつ　なして　この苦海
　そむき去る　と？」

あゝ、ハムレット、われも死は短刀一と刄にあり。

「だが、死ンだあとで　一とつ、
歸いッて來た　もの　は　無い
冥途　の　と　が　氣がゝり。」



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しかし、氣、意志。これ、また、くらげの目だまばかり？ゆめのゆめのまたゆめ、何にもわからんこの人類、たゞたゞよひ浮かぶも。水たちまち引き去ッて、身は落ち入らん九壑の死かげの谷小ぐらく。樹だまさますもおそろしいわれは戀とうたがひ、二つをいのちとして生くるもののやうだなア。〔書を閉ぢる。〕

　こんなとこに居るほど、苦惱は增さるばかりだ。何にも知らんをぢをば、毎日わづらはしい。宮城如きやつばら討つはやすいが、しかし、殺ろしてまた何んになる？それに、これにだまされ、そゝのかされた浪子。病氣だから、たび／＼尋づね行くを、何ゆゑ押し歸へした、ふらちな！おもへばにッくい雪子、宮城といひたくみて、われとの仲絕つのか？

　いや、さうで無い、浪子孃。きみがやさしいおもかげは、わがさびしいたび路を照らす花であッてくれ。〔微笑〕つたないわが身なれば、粗疎なともしたらうが、―われも醫者だ、何ゆゑ〔目も引きつる〕病氣見せぬ？馬鹿軍醫、馬鹿宮城の胴根性に、さじの加減があるのか？―大魔神！は、、、！

〔民子、奥のふすまをなかば明ける。〕

民子。あなた、お客さまが。

桂。なにい！

民子。赤木さまが。

桂。また、人殺ろしをつれて來るか？



民子。すれゝ、まア、あなた？

桂。向かふい行け！〔お松もかほを出す。〕

お松。あなた、お客さまがおいであそばしたので御坐ります。

桂。ほッて置け。

お松。それでも、あのまゝお歸いし申されませぬ。お通し申しませうか？

桂。どうでもいゝ、來るな。

お松。そんなら、いま、お通し申します。

〔ふすまを立てる。〕

桂。〔ひとり。〕かくもつまらんうき世に、なぜわれは生まれた？かれ木の山いち面神の火をつけたやうに、もえあがッたわが思想、いち度九天に達しても、たちまち九泉にくだる。いらぬ限ぎりつけられ、いかにもがきもがくも、人はすべてむしけら、矢張り土中をはッて居る。煩悶また焦心、身づからどろ以ッて洗らふどろの世。けがれを脫せんと欲して、脫するとが出來ない。むらがッてくる過去未來、おしせまるこのほだし。してもまた、のがれ難い世の中だなア。

〔奥より赤木出る。〕

赤木。桂君。

桂。やア、きみか？

赤木。失敬。〔すはる〕

桂。どうだ？

赤木。このごろは、どうしてェるね？

桂。達者だ、いし地藏にでも……

赤木。これャまけぬと？

桂。は、、、！

赤木。きみャア相變らず、きざんだ像が笑らッてるやうだ。

桂。それャア、そんなでも、ギリシャのやうな裸體美人であッたなら、月のひかりうつッても、毫も耻づるいろ見えず、情無くして、して、情つきない。かくの如くなッてこそ、美の精いたれりつくせりだ。ところが、きみ、皮肉芝居のざま見よ。まッぱだかにでもなッてさ、おどらねャア、見物のお氣に入りたてまつらぬのだ。は、、、！

赤木。きみはよく、出しぬけにいひ出す人間だな。もッと、おちついたらどうだね？

桂。ふゝ、これが落ちついとるのさ。〔お松茶を以ッていて來たる。〕御苦勞さん。

お松。いらッしゃいまし。—何にも御苦勞でャア御坐いませんよ。〔茶を入れる。〕あなたはいつか、公園でお目にかゝッたおかた？

赤木。さうです、いち度お目にかゝりましたね。

お松。しぶ茶で御坐りますが。〔茶を出す。〕桂さまはいち日、つくえにお向かひあそばし、おさむしさうでいらッしゃいますから、あなたはどうぞ、たび／＼、おあすびに來てあげてくださりませ。

赤木。ありがたう。—あの、きみ、僕は、けふ、お別れに來たんだ。

桂。何んでだ？

赤木。僕は佛蘭西へ行く。

桂。え、何んの爲め？

赤木。つとめの都合で、どうやら、宮城が世話してくれたらしい。

桂。宮城がゝ？〔おも入れ。〕

お松。それは、まア、おなごりおしいことを、折角おなじみにならうとしましてね。—まア、それでは御ゆッくりおはなしあそばしませ。

赤木。ありがたう。

お松。御免くださりませ。〔は入る。〕

赤木。きみ、お名ごりおしいよ。

桂。それャア、不意だからね。

赤木。僕も何んだかわかれたく無い。

桂。して、滋屋にあッたか？

赤木。うン、きのふ、わかれて來たんだ。

桂。涙子はどうして居るね？

赤木。あれャア、なぜか知らんが、誰れにも逢はんといッてる。

桂。きみャア逢ッたんか？

赤木。いや／＼、醫者にもかゝらなくッて、やう／＼、きのふ、宮城に見せたかゝりさ。

桂。なァに、きのふでャアあるまい？

赤木。いや、きのふさ。それが、まア、きみ、聽いたら、病人はいやといふのを、うちで無理に見せたんだ。宮城は、きみ、ちかごろ、雪子のおやに大變もてなされて居るぞ。

桂。そんなら、きみ、病氣だけはほんとだね？



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

赤木。それャア、きみ。實は、きみ、癩病だとよ。

桂。うゝッ！

赤木。さア、おどろくだらうて。知らなんだが、雪子には、まへからはなしてあッたさうだし。きのふ、宮城の診斷でわかッた、うちのものには。ちすぢ血統のわるいんだもの、實に氣の毒でャア無いか?

桂。あゝ、天！何んぞわれらをなやます！

赤木。きみも尋づねたさうだが、もう、誰れにも逢はないよ。また、恥ぢて、逢はれまいよ。

桂。これで、僕もわかッたが、そんなはあはれなもの、涙子のむねがおもひやられる。だが、僕もまた、恰もいち明鏡に血ついた如く、わが戀、一點のうらみはのこる。

赤木。きみに對しても、また、實、氣の毒など。どうしても、決してわすれられまい。

桂。きみを遠くこれからおもふ如く、涙子は、僕が生きてるあいだは、決してわすれられない。

赤木。若しものとがあッたら、雪子もまたかなしまう。きみには逢へなくなる、僕は暫らく居らない。ふたりの身に取ッたなら、そんなだもの、かなしからう。

桂。僕はあすから、大淨寺の書齋を借りる。

赤木。それでは、なほ更らよく、しづかに、考がへ給へ。手がみはどうぞ、これから、たび／＼。

桂。きみもまた。

赤木。それャア、きみ。

桂。おわかれでもしやうか?

赤木。けふはよしてくれ、まだ行くとこがあるから。

桂。そんなら、あすでも。

赤木。どうぜ、あす、もういち度逢ふから。失敬。

桂。まア、いゝでャないか?

赤木。いや、あす、またゆッくりはなししやう。

桂。さうか、失敬。

赤木。失敬。〔兩人立たんとする。奥よりお松、湯を以ッてくる。〕

お松。おや、もう、お歸りですか?

赤木。はい、もう歸ります。

お松。あまりお早やう御坐りませぬか?

赤木。用がありますから。

お松。それでは、またいらッしゃいまし。

赤木。ありがたう。〔桂、赤木を送くッては入る。〕

お松。〔茶椀などかたづけつゝ〕桂さまはどうするおつもりだか、うちのお嬢さまばかりに心配させて?横から見て居ても、自分までが氣が落ちつかぬ。このお茶の飲みやう！丁度、御自分のおいへにおかまいあそばさぬのとおなじと。——こゝにもこぼれて。

〔お松疊をふく、桂もどる。〕

あなた、あまりお早やいお歸りで御坐りませぬか?——御勉强あそばしませ。〔茶道具を以ッて、入る。〕

桂。〔ひとり〕月は照らさんと欲して、またもくもるわがむね。いのちはそのあまぐも、湧いてかゝるやみぞら。わから

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

めとには、また、分らぬとかさなる。うとましいは〔木のかしら〕このひとりだなア。〔幕〕。

## ◎三幕目。

### （一）溢屋本宅坐敷の場。

〔本舞臺すべて溢屋本宅の客間、繁太郎妻お鶴と宮城軍醫とはなしの躰にて、幕あく。〕

お鶴。けふは、かったいはどうで御坐りまする?

宮城。相變らず、何んとも手のつけどころが無い。

お鶴。さうです、まア、あのくさいこと。近處に居ても、變ににほってくるやうでねエ。

宮城。もう、ながいことはあるまい。

お鶴。さうですか、何んとも困まったもの。何んぼ雪子だって、はじめから癩病と知ってれば、つれ込んでも來なかったゞらうに。あれが馬鹿なんですよ。うちでは、もう、あなたに診察してもらう前から、なんだか變だといってたんですものを。第いち、見てもらうのがいやで、雪子がすゝめても聽かないし、やうよのとであなたに見せたんでせう?それに、あなたのおくすりも飲まず、癩病だといはれてから、まア、御覧なさい、あのこわいかほをして、ねエ、おほゝ、まア、おこぜか何んかのやうに。

宮城。しかし、まア、かわいさうでャア無いか?醫者ならばこそ見せるが、誰れだって、自分のつま先の傷さへ人に隱くすものだのに。まさか、人にかったいぐすりを飲まされたのでャア無し、先祖代々の血すぢがくさるんだもの、雪子さんにもはじめははなさなかったのは尤もさ。

お鶴。尤もだって、こっちの迷惑でさア。

宮城。しかし、雪子さんはやさしいから、たとへはなされても、それをしほにことはりは成されまい。

お鶴。馬鹿だから、人に賴まれると、あとでの厄介も知らんで、「さア〳〵おいでなさい」とつれて來るんですとも。—いや、しかし、人のおよめにならうとおもやア、あゝすなほで無くってャアいけないですよ、舅なぞが居て御覧なさい。しかし、あなたはおひとりだから。

宮城。さうです、舅もなければャア、何にもない、二代目の六無齋のやうだ。

お鶴。でも、おかねは御坐りませう、おほゝゝ！

宮城。無いかも知れん。—こないだまでは、した役に山口といふ厄介ものがあったが、それも追ひ出してしまったし、まア、わたしぐらゐ氣樂なものァなからうて。

お鶴。雪子があなたの奥さんのあとへ行けば、あれもそんなら氣樂でせうよ、おほゝゝ！〔奥より繁太郎。〕

繁太。どうだ、お鶴、見てもらッたか?

お鶴。まア、ちョいと、涙子はもうながいとは無いとさ。

繁太。それでャア、もう、助かる見込みは御坐りませんか?

宮城。ありませんね。



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

お鶴。　いッそ、死んでしまうなら、早やく死んでしまッたらかたづくに。
繁太。　そんなとがあるものか、まァ、雪子もいまゝで世話になってたものだらう？
お鶴。　だッて、どう せ死ぬなら、早やく死ぬが涙子に取ッて氣がねがない。
繁太。　それも壽命だから仕かたが無いが、うつくしかッたものが急にあんなになるもおしいものだ。
宮城。　いや、もう、運といふものは無情なもので、あたら花を散らしますわい。
繁太。　もう、雪子もおもひ切らねばならぬか。くすりを飲めばいゝに、すこしも飲もともせず。
お鶴。　剛情といへば、まァ、あの雪子もどうしてあんなに剛情だらう、宮城さんを知らないでいやがッたり？
宮城。　いや、どうせ、ぢゝいのとですから、おいやといはれれャァ、無理におすゝめはくださるな。
お鶴。　今夜、きびしういッて見るだらうでャァ御坐いませんか？
繁太。　おまいから、よく得心させて見るがいゝ、あまりおこらさないやうに。
お鶴。〔宮城に〕　あなたは、まァ、御ゆッくりなさりませ、何にも御坐りませんが、〔繁太郎に向ひ〕　ねェ、あなた、………
繁太。　それがよからう。奥の間で………
お鶴。　そんなら、一杯〔木のかしら〕

三人。　催しませう。
〔道具まはる。〕

## (二)　大淨寺の墓場。

〔本舞臺、すべて序幕返へしの通り。入相のかねにて、下手より博徒三名。〕

一。　おい〳〵、この墓だ、この。
二。　うン、いゝいし。男爵、華族のだな。
三。　こいつうこわせャァ、勝負ァ手のひら。
一。　から毎日しくじッてャァ、なかまにつらも出せねェや。
二。　誰れもさ。あの勘太、なか〳〵あやかりものめ！
三。　何にさ。今夜こそいち番、運はこッちい向ひて來らァ。
一。　今夜こそ、勝たねェで置くものか？
二。　このいしせェ缺ェで以ッてれャァ、聖天さまもおよばねェ信心だ。
三。　かわいさうだなァ、立派のを？
一。　なァに、から缺くのだ。
二。　なか〳〵かてェぞ。
三。　これャ、こんなにもろく。
一。　もろくとァ、緣喜のわりい。
二。　いやさ、蒙碌にャァまだならねェ。——さァ、けェだ。これで、さいは立派においらのものだ。
三。　何んだ、手めェばかりしめる氣か？
〔上手より、桂吾員おも入れして出てくる。〕
桂。　あなたがたは何にをするのです！

一。　へェ、何にもしては居りやせん。
桂。　なぜ、そこに居る？
二。　何のわけでも御ぜェやせん、へエ。
三。　旦那、うめェはなしは御ぜェやせんか？
桂。　これャ、そこのけ！
一。　何んだ、したから出れャァ、つけャァがって？
二。　こゝに居るのが………
三人。　何んでわりい？
桂〔欠いだいしに氣がついたこなし。〕そのいしは何んだ？あッ！人の墓を缺いだり？
一。　人のなら、そんなおどしはよしねェ。
二三。　おまいさんに關したとでャァねェし。
桂。　これはわたしのおやだ。
三人。　へえ、おまいさんのおやで御ぜェますか？
〔三人すこし引け味のついたこなし。下手より、大淨寺の和尙。〕
和尙。　みなさん、何にをして御坐る？
桂。　いま、墓のいしを缺いだりするやつ！
和尙。　お前さんたちが來て、いしを缺くから、こちらでたびたび迷惑します。これから、こゝの墓はひかへてくだされ。
一。　和尙さん、もう、これからやって來ませんから。
二、三。　わりいとをやりました。
和尙。　もう、來てはなりませんぞ。
一。　へェ、もう、來ません。――さァ、けェらうでャァねェか？
二、三。　さァ、けェらう。〔三人捨ぜりふにて、上手へは入る。〕
桂。　馬鹿なやつもあるもの、のら〳〵と三人づれとァ。何んの爲めに墓のいしを缺いだり、馬鹿〳〵しい、何んになる！
和尙。　いや、あれはみなばくち打ち。墓の石を持って居ると、勝負に負けぬといふので御坐ります。
桂。　はゝァ、なる程、そんなはなしがありますか？――ばくち打も、かたき討ちも、死んではおなじ墓のいし。
和尙。　いや、大部缺いで行きましたぞ、仕かたが無いごろつき！
桂。　つき日立つは早やいもの。それも知らず、うか〳〵過ぎるものゝ氣が知れん。
和尙。　實に、おや御さまがお亡くなりなされてから、もう十年。
桂。　いつまで待ったらいゝのか、こゝろのうち？
和尙。　和尙はお察し申しまする。
〔下手より寺男莊平。〕
莊平。　さァ、御膳が出來まして御坐りまする。
和尙。　それでは、桂さん、まゐりませう。
桂。　いや、わたしはちョッと水でも手向けますから。
莊平。　それでは、手桶は向ふに乾して御坐ります。
〔三人下手へは入る。本釣鐘、上手より山口進、下手より入れずみ勘太、共に頰かぶり。〕

勘太。　おやかた。

山口。　勘太。〔共に頬かぶりを取る。〕

勘太。　今夜、いよ〳〵だな？

山口。　うゝ、いよ〳〵。謚屋といふ倉ァざく〳〵あるからね。

勘太。　それで、わッちァなかまをぬけて來た。

山口。　これから行って、しのばうさ。〔墓を見てびッくり。〕「男爵桂正國之墓」。これァ、おいらが讒言して、免職させたもののおやだ。

勘太。　讒言？さすがァおやかた、どこい行ってもぬかりァねェ。

山口。　こんなとこにあるんかい？今夜は入る倉にァ、これのせがれが惚れてる、浪子といふをんなも居らァ。かッたいで、寐てェるだらうよ。

勘太。　きたねェもんの居るとこでァねェか？

山口。　いくらきたねェッて、こッちの仕ごとにァかまはねェ。
〔下手より、手桶をさげて桂。〕

桂。　山口？

山口。　桂か、南無三！〔兩人上手へにげては入る。桂、不審のこなし。〕

桂。　あれがもとの山口？たとへいまはあのなりでも、もとはおなじ軍醫、同僚。われに耻ぢて、何にもにげるにもおよぶまい？何をして居るやら。あゝ、人は落ちぶれば、落ちぶれる〔木のかしら〕ものだなァ。
〔石塔に水をかける見えにて、道具まはる。〕



## (三) 謚屋本宅雪子部屋の場。

〔本舞臺、上手より常足の二重、椽つきの奥坐敷、下手飛石。雪子、ランプのもと、机にもたれて、おも入れ。〕

浄瑠理。「ふけて行くやみ夜に迷ふふたみちの、雪子がおもひ亂だれがみ。うらみをつゝむまゝ母にそむき去らんか、いかにせむ、浪子のうへのおもはれて？身をまかせんか、いかにせむ、こゝろは遠くしのびかね？かぜにさはらぬ女郎花、なびきかねたる風情なり。

雪子。　つらいとはたゞ人の身のうへとばかりおもッて居たに、いまはわが身におぼへられる。若し、ほんとの母さまが居てくださッたら、どうして、まァ、こんなとがあらう？いかに無慈悲な母様でゝとて、いやなものを無理によめにやる、そんなつれないとはされまいもの。宮城さんのやうな人に行けとは、あんまりといへばあんまりな。ええッ！父上もどうしたと、とめろとはせず、毎日、一所になッて行かそとは！そんなにわたしが邪魔なら、いッそ、親たしい浪子さんと、たとへかほはふくれて來ても、からだはくされてしまッても、一所に死んでしまいたい。

浄瑠理。「どう、まァ、これがしのばれョと、そで食ひ切ってしのび泣く。折から、いづる下女お鍋。

お鍋。　雪子さん。あら、まァ、どうしてお泣きなされます？えゝ？まァ、あなた、うれしいとが御坐りますぞ。

雪子。　知ッてる。

お鍋。　それに、どうしてお泣きなさる？

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

田川大吉郎著　新刊

# 第二維新と基督教

定價十二錢
郵稅四錢

「第二維新」をば政治問題なりとのみ思惟する人の爲めに、「第二維新」をば宗教問題ならずと思惟する人の爲に、「第二維新」をば基督教徒の問題ならずと思惟する人の爲に、「第二維新」をば宗教革命の時期ならずと思惟する人の爲に、「其蒙を啓き其迷ひを散ぜんとして、著者は此書を著はせりと云ふ、日清事件は起り、日英條約改正は成り、我邦の「第二維新」を要するの期は益々迫れり、幸に一本を購讀して「第二維新」の意義と、必要と、事業とを知り玉へ、文章は勁抜、雄渾なり、議論は警新なるも着實なり、以て著者が「第二維新」に對する胸中感慨を知るを得べく、基督教界の有志の士か「第二維新」に對する覺悟、精神を定むる羅針盤と爲るを得ば、著者の幸ひ、併せて弊社の幸ひならん、

北海天福堂主人編

繪入　立志美談

九月廿三日發行
實價三十錢
郵稅六錢

目次


一、立身出世の鏡二宮尊德翁　二、三菱會社の長岩崎彌太郎
三、元弘の勤王家楠正行公　四、木鼠の長吉　五、刺繡奉行
根岸肥前守　六、二刀流の達人宮本武藏　七、天下の糸平田
中平八　八、富竹村の二郎　九、島原の力士玉垣　十、材木
商信濃傳　十一、鍼醫杉山檢校　十二、放蕩子與太郎　十三、
明治の勤王家岩倉公　十四、義侠高田屋嘉兵衛　十五、無筆
の右筆松山伊與　十六、俳優市川團十郎　十七、武藏鐙松前
屋五郎兵衛　十八、蝦夷の探撿者松浦武四郎　十九、日本三
筆の一小野道風　廿、金貸渡邊又左衛門　廿一、非の番頭
三野村利左衛門　廿二、太物問屋堀越角二郎　廿三、大鎗持
蘆田勘助　廿四、陰德家石屋巳之助　廿五、伊賀越の荒木又
右衛門　廿六、紙商紀國屋又右衛門　廿七、義僕上總市兵衛
以上


東京々橋區出雲町一

警醒社書店


---

拜啓各位益々御壯榮爲國家奉賀候陳者曩日　聖駕煥發討清の師を親帥し玉ふ、爾來日々我軍の勝報に接し居候、此摸樣にては奉天府を衝き天津を破り進みて北京城頭旭章旗を亞細亞大陸の朝風に飜すの日も近々のことゝ被存候生等此時運に遭遇し此快事に接すること誠に一大幸福と存居候、然る處ろ此際一種の感情に打たれ候は彼の我征清の義軍に從いて砲烟彈雨の間に馳聘し一朝異域に斃れたる同胞軍人の不幸を想ふの情油然として相生じ候折から平壤の劇戰は端なく余が友人三名をして戰死者名簿の上に列せしめんとは、噫、余これを看て此感殊に深きを覺ゆ、戰場に打死仕ること武夫の本分として名譽の事とは豫て聞及び居候へども我々國民たるもの宜ろしく先づ戰死軍人の爲め一大紀念碑を建設し忠勇烈士の芳勳を萬世に不朽ならしめむこと緊要と存候私事年少不敏と雖ども敢て此大任を完せんことを期し其基本金募集の第一着として日淸韓事件及び我帝國の歷史風景其他百般の寫影畫を携へ來る十一月三日　天長節の佳辰を期し歐米諸國巡廻の途に上らんと存候、而して我帝國百般の事物を幻燈に據て說明し日本帝國の眞價を列國に熟知せしむるの好時機は實に今日に御座候、然る處ろ私義元來一介の寒生にして前途遼遠費用夥多生が一身のよく自辨し得ざる所ろ希くは世の志士仁人、生が一片愛國の精神を推察し玉ひ國家に忠勇なる帝國軍人の名譽及び併せて帝國の光榮を萬世に不朽ならしむる一大功業に同情を表せられ多少に不係生が此義旅に向て餞せられんことを希望致候、敢て各位の尊嚴を犯す罪大なり願くは明察を請ふ

頓首敬白

明治二十七年九月廿三日秋季皇靈祭日

在東京本鄕區新花町新花館

駒田信夫


Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 文學界

第二十一號 九月三十日發兌

みをつくし　孤蝶
紅閨の燈火　天知
題しらす　殘花
破三味線（韻文）　孤蝶
闇夜（續）　一葉
秋の露（韻文）　枯木
蕪村句選

其他時文には長帆子のやぶにらみ（其二、日本評論の宗教論）○紅葉の紫○其他新刊の評くさ〴〵あり

定價一冊六錢○六冊三十三錢○十二冊六十錢○市外郵稅共一冊六錢五厘○六冊三十六錢○十二冊六十六錢○毎月三十日發兌

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社

發賣所　神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

# 透谷集

菊版美本肖像入凡二百七十頁
十月七日發賣定價三十八錢

右は故北村透谷子が遺稿断篇の散逸せんとを惜みて一冊子となしたるものなり。子が轗軻窮愁の短生涯に於て筆にしたるものは悉く網羅蒐集したれば、子が平生の素志を惜む人はこの小集を愛讀せらるゝに吝ならざるべし。この冊子厭世詩家と女性の一文に始まりて蝶の歌に畢る、心機妙變の論あり、油地獄の評あり、歌念佛の評あり、三日の幻境あり、情熱の辭あり、哀詞の序あり、其他國民の思想を論し、富嶽の詩神を想ひ、情死をあはれみ、ゆきだをれを悲しみ、螢を歌ふ。其他清深の文字少なからず。

發行所　下谷三輪町八十九番地　文學界雜誌社

發行所　神田表神保町六番地　女學雜誌社書店


發行所　東京府北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三



東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY